

## 文豪鴟外も関わった宝物の虫干し

—履の主構成材は牛皺革—

学術博士・元(社)日本タンナーズ協会専務理事 出口 公 長

### 鴟外が帝室博物館総長に就任

奈良公園の一角、春日大社と東大寺大仏殿への道路の交差点の傍に「鴟外の門」がひっそりと建っている。鴟外が、正倉院の宝物の曝涼（虫干し）の際立会人として参列したとき、宿舎とした家屋があったところである。今は門だけが残され、大きな記念碑とともに往時の様子を偲ぶことが出来る。碑文には次のように記されている。

『森鴟外（1862～1922）は、明治時代から大正時代にかけての小説家・評論家で、軍医としても名高く、近代日本を代表する知識人のひとりです。鴟外は大正6年（1917）12月に帝室博物館総長に任命され、大正11年7月に亡くなるまでその職にありました。帝室博物館総長は、東京・京都・奈良の帝室博物館を統括する要職でした。大正7年から10年まで、秋になると、鴟外は正倉院宝庫の開封に立ち会うため奈良を訪れ、滞在中の宿舎は奈良国立博物館の東北隅、この場所にありました。公務の合間には奈良の古社寺や旧跡を精力的に訪ね、「寧楽訪古録」や「奈良五十首」を残しています。また妻子に宛てた手紙や絵葉書を頻繁に送っていますが、その中には博物館周辺の略図を書き、宿舎の位置に「パパのいるところ」と書き込んだものもあります。宿舎の建物はすでに取り壊され、ただひと



写真「鴟外の門」

つ残されたこの門だけが鴟外をしのばせてくれます。』

また、正倉院に関して鴟外はこんな歌を残している。

勅封<sup>たかな</sup>の筍の皮切りほどく  
剪刀<sup>かみそり</sup>の音の寒きあかつき

在任中の5年間、毎年1カ月ほど奈良に来た鴟外は、ほぼ毎日ぐらい娘の杏奴あてに葉書を送り続けたという。正倉院の構造や公園の鹿の様子なども伝えている。正倉院の周りにはレンゲがいっぱい咲いているとも記しているが、今日ではその様子はまったくない。

### 正倉院拝観の特例をひらく

当時、曝涼中に宝物を拝観する制度があったが、拝観できるのは一定の有資格者が申請して宮内大臣の許可が下りた者に限

られた。有資格者とは「高等官及高等官待遇者」「有爵者」「貴族院議員」「衆議院議員」「学位ヲ有スル者」などで、八項目があった。しかし、森総長の尽力で次の一項が加えられ、大正9年度から実施された。すなわち「前項ニ掲クル者ヲ除クノ外宮内大臣ニ於テ學術技芸ニ関シ相当ノ経歴アリト認メタル者ニハ特ニ拝観ノ許可ヲ与フルコトアルヘシ」となった。宝物調査に筆者のような研究者が参画できるようになったのも、遠くには文化人鴟外の開明的な思想が先鞭をつけていたお蔭といってもよからうと、わたしは感じているところである。

### 皮革を用いた宝物

全体の宝物の数が9,000点とも万余ともいわれる中で、皮革を用いた品目がいくらかあるのかという点については、実はよく分からないようである。しかし今回、正倉院事務所が準備した「皮革製宝物調査品目」のリストに取り上げられたのは222点で、この中から適宜品目を選んで材質調査を3年間で行った。皮革が用いられている宝物類の主要な用途としては、武具、箱類、楽器・伎楽、帯類、履物があげられる。

### 調査の方法

正倉院の宝物は、言うまでもなく伝世の世界屈指の貴重な品々である。従って、宝物の皮革材質調査に当ってはその取り扱い・接し方に関して細心の注意が払われねばならない。正倉院事務所の関係者に倣ってわたしども調査員は行動し、接した。調査の基本的な要点は、次のようになる。

- ・非破壊調査である
- ・肉眼及び光学機器を活用し、かつ経験

的知見に基づいて動物種を判定する

- ・同一の品物を4人の調査員が観察し、自由に記録し、かつ意見を述べる

調査した結果について各人が記録を提出し、出口が集約した。宝物によっては見解が分かれることは当然あるので、その場合は意見を併記した。また、損傷の激しい宝物が多く、その状態にも触れながら説明する必要があったことから、原稿では説明に資する目的でイメージ図を付記した。即ち、調査の記録に具体性を持たせる手段として、宝物の全景写真、イメージ図、及び顕微鏡写真を一つのセットにした。顕微鏡写真は、調査員の要請による箇所・部分を事務所研究者により撮影されたものである。イメージ図はワードの「オートシェイプ」機能を利用して出口が作成した。しかし、報告書の印刷に当って、諸般の事情から思い切った割愛をせざるを得なかった（本編ではその一部を紹介する）。

### 古代皮革の主役は皺革

皮革を用いた宝物の内、今回調査された品名を項目別にまとめると、前述の通り履物17、楽器8、伎楽2、馬具12、武具10、革帯6、皮箱4、刀剣4、その他13となる（この品数は見方によって若干異なる）。

ここでは頻繁に牛皺革という文字が出てくるが、ここでは筆者は皺革を「しぼかわ」とあえて読んでいる。史料の延喜式では「ひきはだがわ」とするが、同一のものである。つまり、「しぼ」とは姫路白鞣革のように手足で揉み上げたときに生じるうろこ状のしわのことであり、「皺革」とはそのしわのある革のことである。同じ「しぼ」といっても現代のクロム革の銀面に見る、曲げた

ときの細かいしわ（つまり「シボ」）のことではないのである。宝物に使われた牛革の場合、一部の例外を除けば、この皺革が圧倒的に多いのである。

まず、履物から述べてみよう。履の形状には4種あるといわれているが、筆者には区分して観察する余裕はなかった。なお、記述で「資料」とあるのは『正倉院寶物』全10巻、毎日新聞社（1995～1997）である。

### 履物

#### 錦履 〈にしきのくつ〉 南倉143

資料：長26.6 幅8.4 爪先高6.3。革製表に紫地錦を貼る。内貼は緋緋。底縁は黒漆塗。内敷は麻布・藁藁。

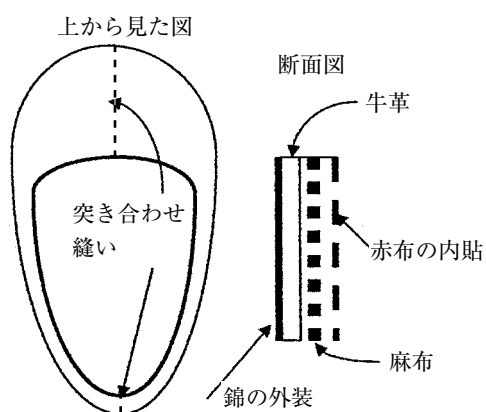


錦履 当時の履としては格調の高い品物であったと思われる。（資料：毎日新聞社刊「正倉院寶物」全10巻）

概要：錦の剥落物が散見され、革の銀面<sup>\*</sup>及び乳頭層<sup>\*</sup>の剥落部分が観察される。虫食いによる銀面の消失が窺える。爪先を上に見て左方の断面には老化した革の組織と裏打ちの麻布の繊維が認められる。（<sup>\*</sup>注：皮の主な構成は内面からいうと、皮下組織、網状層、乳頭層からなり、乳頭層の最上面を銀面という。銀面の形状等は動物種によって様々の特徴を示す。）

側面及び底の革：いずれも牛皺革と見られ

る。左方踵底では侵食された革の乳頭層が露出し、残毛が明瞭に観察される。側面の錦の剥落部分で革の毛穴の存在がうかがえたが、顕微鏡下では布帛の残片の付着が認められた。なお、革は左右及び底の三つの部品に分かれている。



#### 履 第1～10号 (南倉143)

資料：長さ26.5～33.2cm、幅8.5～12.3cm 爪先高8.9～12.2cm。その他の仕様はほぼ共通して革製・黒漆塗・彩絵（白）。芯は麻布・内貼は洗革。内敷は麻布・藁藁。



履第4号 長さ27.8 幅11.0 爪先高11.3cm  
革製 黒漆塗 彩絵（白）  
芯は麻布 内貼は洗革 内敷は麻布  
藁藁（資料：毎日新聞社刊「正倉院寶物」全10巻）

概要：反り上がった爪先から踵にいたる1枚の底革に甲部および左右両側側面部を別に縫い付けている。内面は麻布1～3枚を間に挟んで別の薄革を縫い付ける。爪先の反り返った部分および底縁は黒漆塗りと

し、爪先に唐草文様が白色顔料で描かれる。甲部と側面部には漆木糞様のもの、あるいは裂を貼っていた接着剤様のものが塗られていたが、ほとんど剥落している。

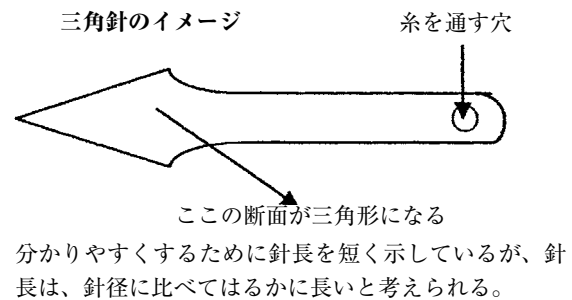
各履に用いられている革の厚みには個体差が見受けられ、製革工程では厚みをあまり調整していないものと考えられるが、履自体の厚みは揃えられているので、布で調整しているのかもしれない。革の縫製は底革の縁に沿って側面の革と縫い付けた痕に三角針の穴が並んでいる。履用の牛革は厚いので、縫製には作業が容易な三角針を使ったことが窺える。なお、縫い糸は外に出ないように縫われている。甲部には反りを持たせるための切り込みがあるものと、無いものがあり、切り込みのあるものは先まで切れ筋のついたものもある。

底・甲・側面：牛革。爪先部は皺の形跡が明瞭である。漆塗膜は銀面から剥離した状態で履に付着していることから、皺革に塗られた漆の原形が保たれていると考えられる。浮き上がった漆膜の下の革では乳頭層が消失しており、漆は皺の状態を見事に反映している。その下の革の表面はかなり平らである。しかも、漆に接する層では薄茶色に変色しているのが見られ、漆が乳頭層にまで浸透しているものも見られる。また、牛革としては珍しく、いくらかの柔らかさが感じられる。

底面は漆のない部分を残している。床に接する部分の皺はかなり削り取られているが、それは滑り止めのためと考えられ、皺の痕跡は全面に残っている。また、革の乳頭層がかなり磨り減った部分では毛根・残毛が認められる。

内貼：観察した各号の履面側の内貼り革の

性状は共通しており、柔らかく、線維も細かい。線維が平面的に交差し、その外側（銀面側）は線維が細かいものも確認できた。その性状及び線維の状態から鹿革と考えられる。内側には麻の布目が規則的に全面に残っており、貼り付けられていたものと考えられる。



### 履の残欠（南倉143）

前記の履が破損したもので、各部位がばらばらの状態で保存されており、構造等を窺い知るにはかえって都合のよい資料といえる。

其1：底から爪先にかけての残片は、牛皺革である。

其2：損傷が特に激しく、革の収縮も大きいため、漆膜の剥がれた状態と革との関連を検討するには、注目すべき標本である。革表面の乳頭層は消失しているが、革に付着した漆膜がかつては皺革であったことをはっきりと示している。この状態は、この履が長年月の間、漆膜を帯びた牛皺革が水分の吸湿放湿の繰り返しや虫害に曝された結果であると推察される。この履でも縫い付けには三角針が用いられている。革はすべて焦茶色に変色している。

其3：牛皺革である。底部には三角針の痕が残っている。履を製作した当時の皺の状態が漆膜に明瞭に映し出されている。この場合も、革の乳頭層が完全に消失している

ことが分かる好例である。革の線維は太くて粗く、牛革の様子を示す。

其5：牛皺革で、乳頭層が消失し茶色に変色している。漆膜は表面の中ほどではわずかに残留し、縫目に沿った辺りには多く残留している。かつては全面に塗られていたことが分かる。縫目痕には三角針の形がある。この残欠においては、履の内側に縦に大きな、うねりをなす皺が何本も走っているが、これだけの皺はかなり大きな被害、例えば水に浸かるようなことがあったことを示すのだろう。それによって生皮の状態に戻り、革が緩み押し込められたまま大きな皺が固定されたものと考えられる。

顕微鏡写真を詳細に観察すると、銀面と乳頭層の消失は必ずしも一様でなく、毛根を含んだ層が残ったり、あるいは、毛根を含んだ層まで綺麗に消失する場合があることが確認された貴重な例である。この場合、毛のほとんどが切断されたような外観をもっているのも注目される。さらに、他の部分によってはミミズが這ったような跡まで見られ、食害を明瞭に示すものもあった。また、牛革の表裏に漆が塗られ、その両面とも、漆に接する部分が著しく茶色に変色し、中ほどはその色が薄いことも明らかになった。

### 履の寸法はかなりバラバラ

今回の調査に当って、『正倉院の寶物』より抜粋して事務所から提供された履資料の数値を拾い出してみた。長さ、幅及び爪先高の3箇所について数値の示されたのは19点、長さは数値幅26.5～31.2cm、平均28.2cm、幅は数値幅9.6～12.3cm、平均11.2cm、爪先高は数値幅8.9～11.6cm、平均10.5cmと

なっている。履の長さが大きいのは、履に詰め物をしたり、足袋を履いたりするためにゆったりと作られたためではなかろうか。さらに、寸法のばらつきから見て、着用者の希望に合わせて作られたようである。個別の寸法は表の通りである。

履の寸法の一覧表 単位：cm

履	長	幅	爪先高
1号	28.6	11.7	11.5
2号	29.5	12.2	11.6
3号	31.2	12.3	10.5
4号	27.8	11.0	11.3
5号	27.4	※8.5	10.4
6号	27.7	11.9	10.0
8号	28.5	11.5	9.5
9号	29.5	11.8	※12.2
10号	28.0	11.4	10.8
11号	27.1	10.5	11.0
12号	27.7	10.6	10.1
13号	27.3	10.9	9.8
14号	26.5	9.6	10.9
15号	27.7	10.7	10.1
16号	※33.2	12.1	8.9
17号	27.9	11.4	10.1
18号	27.3	11.5	9.9
19号	27.9	11.8	11.1
20号	28.1	11.4	10.8
例外値※	33.2	8.5	12.2
数値幅	26.5 ～31.2	9.6 ～12.3	8.9 ～11.6
全合計 19点	535.9	212.8	200.5
平均値	28.2	11.2	10.5